The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編著『移民から教育を考える ： 子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』 ナカニシヤ出版、2019年、249項、定価2530円
Author(s)	大川, ヘナン
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 320-323
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76164
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編著『移民から教育を考える―子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』

ナカニシヤ出版、2019年、249項、定価2530円

大川 ヘナン

日本で「移民」とは誰のことを指すのだろうか。読者の周りには移民はいるのだろうか。日本国政府は移民政策を取っていない。つまり日本には「移民」はいないのだろうか。最近では多くの場面で違う国からやって来た人々を見かける場面がある。コンビニエンスストアでは海外留学生の店員を見かけることもあれば、自動車工場では外国人労働者が昼夜問わず必死に働いている。かれらは移民なのだろうか。読者の皆さんはかれらを「移民」として認識しているのだろうか。そして、かれらがどのような経緯を経て、どのような思いで今日本にいるのかを知っているのだろうか。かく言う筆者自身も幼少期に 17,000km 離れた地球の反対側からやって来た移民である。本書では私たち移民の歴史や今抱えている問題が教育をテーマに描かれている。

本書の特徴として最初にあげられるのは、移民の教育問題について網羅的かつ体系的に取り扱っていることである。今までに多くの学者によって移民の教育についての書籍は出版されてきたが、その多くがそれぞれの固有の問題を専門的に取り扱っており、ある一定の興味を持った読者であれば勉強になるものが多数ある。これから移民の教育について勉強したい、知りたいと言う読者にはその専門性が少しチャレンジングな場合がある。しかし、本書はそのような、これら勉強を始める者にとってはうってつけである。丁寧かつ分かりやすい説明がされており、さらに各章の終わりには議論すべき点が提示されている。一方で初心者向けであり、すでに勉強しているものには不向きかと言うとそうでもない。筆者自身も当事者として移民の教育問題について研究をしている一人であるが、知識や理解は自分の分野のみに偏っていることを悩んでいたところに本書に出会ったのである。筆者は「ニューカマー」の研究を行っているが、今までに他の移民たちが問題を抱えているということは知りつつも、かれらの歴史や問題、さらにそれに対する政府の動きに関しては知識が十分ではなかった。本書ではそのように自分の研究分野以外にも網羅的に勉強できる点において、初心者のみならず、すでに勉強をしている者にとっても読む価値は高い。また各章の終わりには方法論や、映画に関するコラムが添えられており、それらのコラムがさらに豊かな視点で書かれて

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；rennan428@gmail.com

おり、必読である。

本書の構成は３部構成であり、パート１では各移民集団として「オールドカマー」「ニューカマー」「海外帰国生」そして「留学生」に章分けをされている。パート２ではそれらの移民の若者を取り囲む生活世界として「家族」「学校」「地域」「労働市場」そして「トランスナショナルな生活世界」について語られている。そしてパート３ではさらに教育にフォーカスして、多様性の包摂に向けた教育として「移民国家アメリカの多文化教育」「多文化共生と日本の学校教育（施策編）」「多文化共生と日本の学校教育（学校実践編）」「外国人」そして「ノンフォーマルな教育と居場所」について議論がされている。これらの14章を挟む形で序章ではグローバル化と日本について言及されており、終章ではこれからの日本の移民の教育について語られている。本書が出版される5ヶ月前に単純労働力不足を補うために「特定技能」という新たな在留資格が設けられた。特定技能１号では家族を連れてくることはできないが、特定技能２号ではその家族の帯同も可能となる。つまり今後の日本においてより多くの外国人が暮らすことになり、より多くの子どもが日本の学校へ通うこととなる。このような社会の流れを受けても、本書で描かれる移民の子どもの教育は重要な議題である。

移民問題を語る際に「オールドカマー」と「ニューカマー」が頻繁に対比される。そのため移民の研究をする際にはこの二者の持つ歴史的背景や移民に際しての心情を理解することは移民研究をする上では大変重要なことである。オールドカマーの人々の民族教育のための戦いは現在も続いているものであり、幾たび機会を奪われようとも、それに抗い、自分たちの民族アイデンティティを次世代に繋げようとしてきた歴史と努力はオールドカマーを語る際に忘れてはいけない点である。一方、オールドカマーと対比して語られるニューカマーは、その来日経緯や多様性により、教育現場に大きなインパクトを与えた。その代表的な問題がやはり「不就学」である。日本人への教育のみを前提とされた日本の教育に、日本人以外の子どもたちが入って来たことはニューカマー児童たちが初めてではない。しかし、オールドカマーとの大きな違いはニューカマーの定住に対する意識であった。それは学校が直面してこなかった現象であった。日本の教育からの排除を民族教育とい

う形で争ったオールドカマーに対して、労働が第一目的であったニューカマーたちにとって「学校へ行かない」選択は今までにないものであった。しかし、そこで問われるのは日本政府のあり方である。入管法改正以来今年初めて文科省は全国でどれほどの不就学の外国人児童がいるか調査を行い、外国人児童の義務教育年齢人口の 15% に当たる 2 万人近い子どもたちが学校へ行かずにいる実態が浮かび上がって来た。この調査を受けて今後の政府の動きにも注目すべきである。

筆者にとって本書で印象的だったのは 2 章の「オールドカマー」及び 3 章の「ニューカマー」を読んだ後に 4 章の「海外帰国生」を読むことであった。外国人として日本で多くの困難を目の当たりにした筆者にとって、4 章の「海外帰国生は、次第に日本の経済発展と国際化の犠牲者であり救済されるべき対象であると認識されるようになりました。」という一文は、暗澹な思いにさせられるものであった。感情的に受け入れることが難しいものであった。もちろん海外帰国生にも困難や苦しみがあったことは容易に想像できるが、政府が海外帰国生にのみ救済の手を差し伸べて、オールドカマーやニューカマーに対してはそれとは全く逆の対応をしてきた。「国籍」という両者の違いは、仮に「移民」とカテゴライズされるなかにおいてもあまりに違う。憤りに近い感情を持たずにはいられなくなる。戦争に翻弄されて日本へやって来たオールドカマーも、自国を離れて日本で働きに来たニューカマーも、両者とも日本に住むという人生の一大決心をしたにも関わらず、日本国政府の上記のような対応はかれらの日本という国への信頼や愛着を削ぐものとなる。

そもそも、バブル期労働不足に悩む日本にとって外国人労働者は渡りに舟であった。50 年前にスイスにおいても同様の労働力不足が起こり、多くのイタリア人移民を受け入れることになった。その当時日本同様に多くの問題が起こり、スイス人劇作家のマックス・フリッシュは「我々は労働力を呼んだが、やってきたのは人間だった。」とその当時の社会を表現した。日本の現状を見ても、同じような状態にあるのではないのだろうか。多くの外国人労働者は国内へ流入してくる。最初は彼らが労働力不足を解決してくれる特効薬のように思われた。労働力は賄われたが、その副作用として教育をはじめとした多くの問題も浮上してきた。しか

し、異文化で生まれ育った人間である以上、そのような問題は事前に予測はできた。しかし、日本国政府はあくまでも「労働力」にのみフォーカスし、彼らの「人間性」を見落としていた。

本書は多様な移民が描かれている点において大変貴重な１冊であるが、一方で議論がされきれていない点もある。多くの日本を生きる「移民」について描かれているが、「アメラジアン」や「ハーフ」もしくは「ダブル」と言われる子どもたちをどのような位置付けとして捉えるべきかが描かれてない。アメラジアンとはアメリカ人とアジア人の両親を持つ子どものことであり、日本の文脈において沖縄で在日米軍兵と地元女性の子どもがアメラジアンと呼ばれ、沖縄では教育問題の一つの争点となっている。また同様に語られることの少ない議題として、本書において「欧米人」は扱われていない。日本にも欧米諸国からやってきた人々はある一定の数在住しており、彼らの子どもの教育問題がテーマとしてあげられることは少ない。しかし彼ら欧米人も移民で、彼らの子どもの教育について考えることも大切である。紙幅があるなかで、すべての移民を扱うことは難しいが、包括的な書籍である以上、かれらの存在にも目配りしてほしかった。

本書を読むことによって「今」の移民の子どもが抱える問題を知ることができるだけでなく、「これから」どのような教育のあり方が必要とされているのかを考える一つの足掛かりを得ることができる。初学者にとっては今ある議題を理解し、自分が取り扱うべき問題を選定するのに本書は適しており、さらに研究者にとっても自分の専門分野をさらに今一度見つめ直すきっかけにもなる。移民について考える全ての人に勧めたい一冊である。